

PROGRAM <上映プログラム>

\*下記 No. は、作品上映の順番です。 \*上映作品は、都合によりプログラムを変更することがございます。また、上映時間は都合により前後する場合があります。予めご了承ください。

10:30~12:00 <特別上映>



**野花**  
監督・横山浩之  
企画・原案：安東恭助  
(日本) 90分

風来坊シリーズの第1弾。本シリーズは日本から海外に向けて日本の良さ“和の職業”をドラマと共に伝えていく。第1作目となる今回は植木屋。昨今の景気で傾きかけた植木屋に、突然現れた娘が巻き起こす涙と笑いのヒューマンドラマ。それぞれの生き方を丁寧に表現。意外な結末に驚きます。またこの作品は、一般社会人が長編映画製作に参入したことで映画界に波紋を広げる作品となり話題に。

12:30~14:50 <京都映像アワード2015 入賞作品上映：前編>



**ある雪の日**  
監督・ホセイン・ジェハニ  
(オーストラリア/イラク) 10分

クルド人の小さな村が雪の中にひっそりと気配を忍ばせている。カメラはこの村のひとつひとつの姿をありのままに映しながら、ゆっくりと内部に迫っていく。そして、私たちはここで起こったある出来事を知る。それはイラン-イラク戦争中、埋められた地雷を売ろうとして爆発の犠牲になった父親と残された母子の現実だった。



**文化の架け橋を目指して**  
監督・稚内北星学園大学  
映像メディア論制作チーム  
(日本) 13分

稚内の郊外にある上勇知の集落。周りは牧草地だがアトリエがあり、老画家が制作している。高橋英生さん80歳。彼は都会と田舎の架け橋を目指している。併設のギャラリーで個展を行い、市民の作品も展示する。奥さんはサロンを設け、お絵描きなどや彼の講演会など市民の広場となっている。夫婦の活動を追う。



**福島浜通りの学校**  
監督・湯本雅典  
(日本) 20分

震災から4年が経過し、復興が進んでいる一方、福島原発から最も近い学校は未だにもとの場所には戻れない。放射能から逃れるために50校以上が避難している。各地でプレハブなど応急で開校しているが、教職員父兄の悩みは大きい。学力向上の前にやらなければならない難問だらけだ。



**UNDO**  
監督・ジャン・ガブリエル・ペリオ  
(フランス) 10分

過去の出来事を映像で巻き戻していく。ただ単調な巻き戻しのシーンがいつの間にか、「もし時間を巻き戻したら…」という思いが滲み出てくる。現実と空想の間で心を揺さぶられる作品。



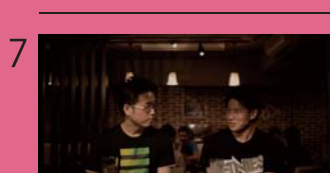
**君が笑ってくれるなら**  
監督・神山大世  
(日本) 15分39秒  
• 埼玉県立芸術総合高等学校・映像芸術科

「俺はこの学校が大嫌いだ」。たわいないことではしゃぐクラスメイトを冷めた目で見ていた主人公が、想いを寄せる少女の笑顔を引き出すために一念発起する。自らが動きだすことで、周囲との関係や心境が変化していく様子をテンポよく描いた作品。



**夕焼けの翌日は晴れ**  
監督・池田夏央  
(日本) 15分3秒  
• 埼玉県立芸術総合高等学校・映像芸術科

友人関係、学業、スポーツ…頑張っているのにうまくいかない。悩みもがきながら努力を重ね続けていても、壁にぶつかった時には諦めそうになる。そんな時、支えてくれるのは—。高校生の挫折と成長、仲間との友情が爽やかに展開される。



**upland**  
監督・高坂聖太郎  
(日本) 24分48秒  
• 日本大学芸術学部映画学科

趣味の写真撮影で出会った二人の男性。お互い魅かれ合いながらも、ある出来事がきっかけとなり気持ちがずれ違っていく。美しい映像とともに性的マイノリティーの恋愛の苦悩が繊細に描かれる。次第に同性であることを越えた愛のカタチが現れてくる。



**また明日**  
制作・チャイルドライン京都  
編集・岡崎まゆみ  
(日本) 31分

いじめや虐待、自殺など、子どもを取り巻く状況は厳しい。孤独を感じ、生き辛さを抱えた子どもたちをサポートするために1本の電話で心を繋ごうとする「チャイルドライン」の活動を、高校生が自身の実体験に基づいて制作した映画を再編集して描き出す。

14:50~15:00 <休憩>

15:00~17:00 <京都映像アワード2015 入賞作品上映：後編>



**伝える、伝わる** ~生活図画事件の証言~  
監督・北海道旭川工業高等学校  
KBS旭工放送局  
(日本) 19分10秒

戦前、旭川師範学校生活図画事件で起訴された学生たちの証言で構成された作品。生活図画とは身の周りの生活をありのままに描こうとする美術教育だが、当時の軍国主義の政府からは危険思想だと激しく弾圧されたのだ。過去に自由に表現できない、発言できない社会があった事を高校生たちは学ぶ。



**ろう者が戦争の時代を語る**  
監督・近藤玄隆 / 千葉視覚障害者センター  
(日本) 20分

3人の聾(ろう)者が当時の戦争体験を語る。召集令状が届いて始まる兄弟喧嘩、戦闘機が頭上を通る時、表に出てお辞儀をした事、潮干狩りで敵機に襲われ九死に一生を得た事、捕虜の処刑や広島原爆を垣間見た事など貴重な内容ばかりだ。手話の表現の雄弁さには改めて驚く。背景の写真も効果的だ。



**アンマン郊外に育って**  
監督・ハジム・ビタール  
(パレスチナ/ヨルダン) 8分

ヨルダンの貧しい家庭が直面する現実をモノクロの映像で追った、現実的でありながら幻想的な作品。今なお世界には困窮にあえぐ人々が溢れている。難民という暮らし、貧しさ、そしてその中でも元気に生きる子供達の実顔。そういう現実がカメラの向こうに横たわっている。



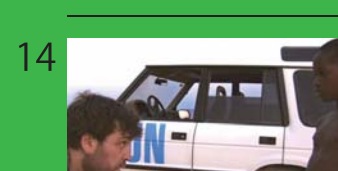
**地図から消された島**  
監督・松田治三  
(日本) 19分15秒

戦時中、風光明媚な小さな島、大久野島が突然地図から消された。この島には密かに科学工場があり、毒ガスを作っていた。働く人は何故か色が黒いのは、ガスが汗にしみ込んで、ガス焼けしたからだと言う。作者は当時の証言を元に生々しい事実を探っていく。当時テスト用に飼育された兎が、今では島の名物となっている。



**YOU, person who appeared or left behind**  
監督・長谷川 哲  
(日本) 15分

私たちはこの可視光域の世界の中に存在し、それぞれの生きる役割を担いながら存在しています。この世界に現れて必死に生き、そして死ぬことにより人生という舞台から退場する。私たち人間は何かの解決を得ぬままに生きて死ぬという行為を繰り返してきたといえるでしょう。この作品を見られる人それぞれが、それぞれの思いの中で生きる意味に一時思いをはせることになればと思います。



**ロスト**  
監督・アルベルト・ドラド  
(スペイン) 4分

アフリカの雄大な景観が広がる大地。ひとりの少年が、国連軍の車の前で兵士から名前を訊かれる。「名前はサリフ、10歳」と答える少年。ところが、一瞬のち……。アフリカにおける少年兵の問題を、切れ味鋭い映像のなかに描き出した衝撃的な作品。カットを割らず、少年のバスト・ショットからフル・ショット、そしてロング・ショットと、カメラの位置を変えてゆくことによって、次第に状況が明らかになってゆく仕掛けも秀逸。



**The Last Chapter**  
監督・Makiko Ishihara (石原牧子)  
(カナダ) 20分

作者の亡父が書いた回想録をもとにカナダの家族と日本の家族を通して父を理解しようとする心の旅のドキュメンタリー。厳格な父はその最終章で子ども達を責め家族の溝を深くした。家族の思い出を振り返りながら、あらためて父の思いや真意を理解しようとする。



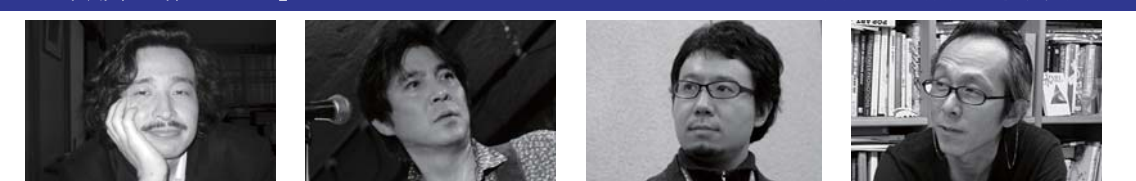
**トーの死** La Mort de Tau - The death of Tau  
監督・ブルベス・ジェローム  
(フランス) 10分16秒

命在るものは全て、他の生き物の命を自分の命に変えなくては生きていけない。それは自然の摂理であり、生きるものの宿命。自分が生きながらえるために命を奪い、また逆に命を狙われる。トーの死に出会い、それぞれが「死ぬこと」と「生きること」の運命に直面する悲しくも残酷な物語。

17:00~18:30 <トークショー：「映画は、誰のものか」—<京都メディア・アート・ラボ特別企画>—

18:30~19:30 <授賞式>

映像を武器に、映像にメッセージを託して個人が世界に発信する時代。戦後70年、再び平和を考える時代の転換期に「映像の果たすべき役割とは何か」を現代社会と作品を通して議論する。



杉原賢彦 • 映画批評家  
佐藤博昭 • ビデオ作家  
谷元浩之 • プログラミングキュレーター  
広瀬宏 • 京都国際インディーズ映画祭 代表